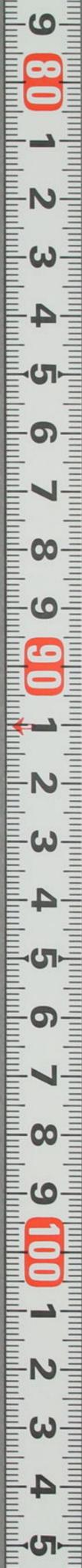
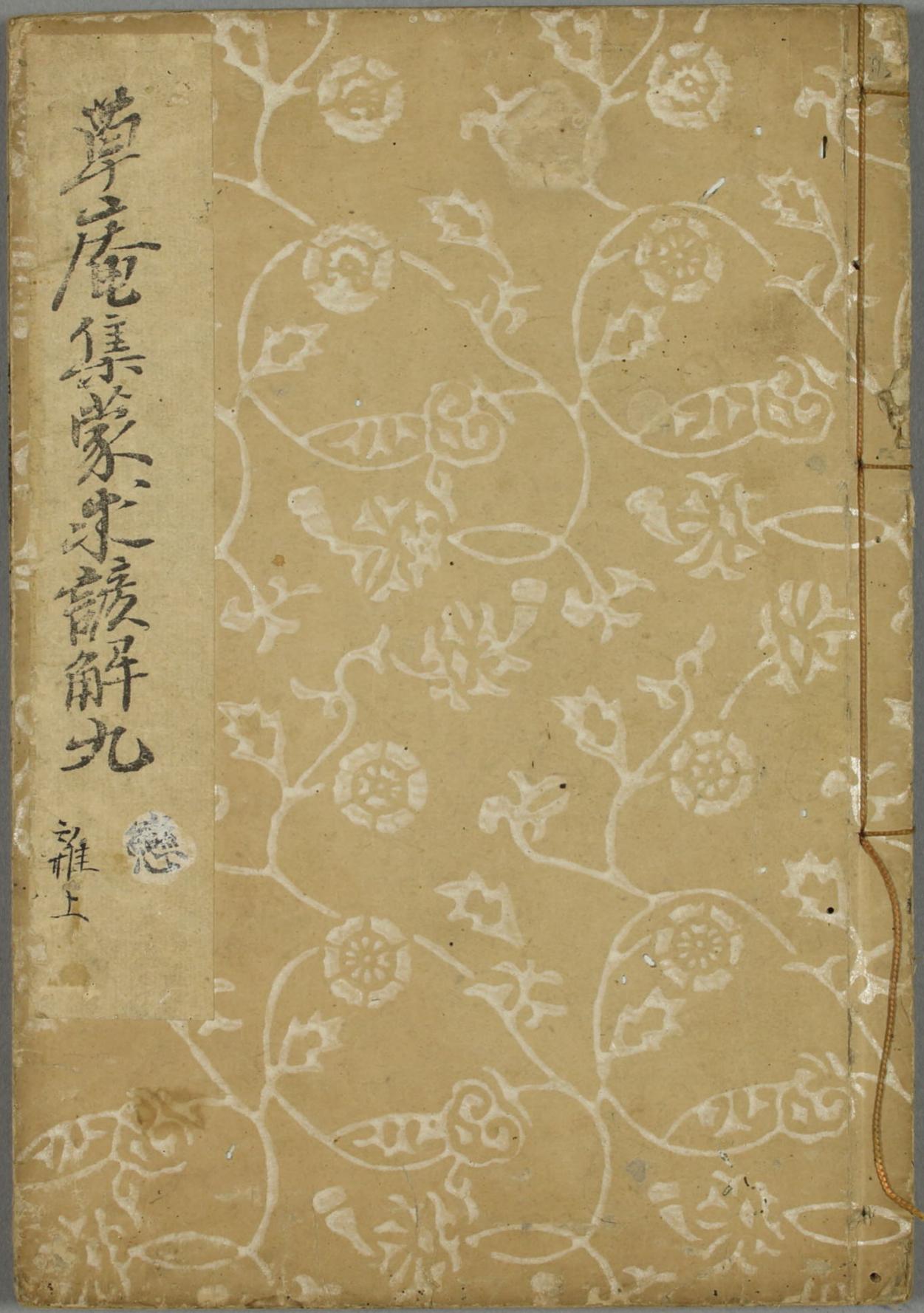


尊庵集蒙求齋解九

雜上



草庵和歌集蒙求諺解卷第十二

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

雜奇

氏部御家一日千首奇よ 天象

くふくわくと絶どど思と久々これるふ月日れりあうけく
とろくわくとんは言らんと明らと也。夜晝乃飯也 けつとわくやち
がれぬおを極たいつれんまらうらわいぬん 衆人皆言 言れい月の思し。
明らと日乃思して天を仰めらうらうて。同断なく世界を思と
思えをふらふ。日月行道の来。書經堯典帝曰咨汝羲
暨和。其月三百有六旬有六日云云。此は言委略之

茅持院緒た大長家奇よ 曉

ゆあふ孫是ふをまきり里をふふをれらう孫はらうあう孫と

鷄の神方は高うは珠より里と成り鳴来されば。はづらひのけ
まども。秘笈の公い静かちりゆきさゆり也。孟子浩然氣をたし
彈正。予親王家小童よませりまへ海 冥鷄

冥れ戸は鳥れそ糸のいさへと程りりりのある世ありたり
鳥れそまのま。史記孟嘗君傳曰。秦昭王囚孟嘗君
君變姓名夜半至函谷關。法雞鳴出谷。恐追至
居下坐者能為雞鳴。於是群雞皆鳴。遂出關。燕丹
去秦。夜到關。門不用。丹為雞鳴。衆雞皆鳴。遂得
逃歸。類聚 刺をこめてまのそまはさうふとへんを返の冥
はゆるじ 清少納言 拾遺上 上代淳朴とて仍る有ゆきふ。其何とま
だ仍るい有て鳥のそま成るうと也。ゆしてませよ人の情深
虚めて。次身よ仍るのゆりたるるれい。人こ情じづよの成也
曉鷄

るれまをゆきまらうとらうと成れ秘笈の後れ老の眠を
老人い秘れれがご。よくねらう物也。海と成れ秘笈とては。やう
くして眠りされい鷄の鳴く又寝るくも也

氏部師家百首一 海上曉雲

ふれくとみゆらぐりふゆかをさるこれ真よのふよこごも
表の明り何分也。世よが又一色りうくと成を。明暗と云。其何分。
ふれくとみゆらぐりふゆかをさるこれ真よのふよこごも
く横雲のめりりる系あり。るるまも也

表を院二品は親王家十首一 海上眺雲

あのをれらごのまならさるねれ然るは波ふそごうらり
はみ狭る裁難と入て。後人不知有。向信のたさる方
よ仍るも風でたりのまらぶ也。うら 瀬の地好とこごも仍
毎の然るかくはらふ仍るさる波のよたきれうらりる曉の

系也。昔の在り難。括列也。塩路。波路と云。詞。連。舟に在り。船と云。こ
らぞと云。い。こ。前。と云。あ。い。さ。唯。塩のよ。信。よ。ま。と。也。

海也。夕。や。と。

波のよ。入。り。ら。く。成。ふ。ら。り。沖。小。た。も。く。海。止。れ。け。り。お
波のよ。上。落。つ。り。る。入。日。れ。わ。ら。ら。く。舟。舟。の。そ。も。た。も。京。の。ら
中。ら。ら。伴。也。き。も。く。ふ。い。ぬ。あ。ま。い。依。也。 翠。け。ま。た。引。と。り。け。く
保。子。繩。を。も。く。ふ。公。君。も。く。ら。や。舞。海。と。月。よ。委。一

難波。少。く。よ。ま。と。一

難波。く。ま。れ。夕。の。家。波。の。人。ふ。も。成。ま。い。と。し。く。ふ。ぞ。お。も。わ。る
夕。岳。も。ま。也。夕。の。も。れ。わ。る。波。の。と。け。ら。ふ。伊。約。ふ。の。言。お。り。た
ふ。京。也。面。白。伴。也

後三位 有能の 家持 淳子 繪 西洲十境を 幸く 人々 小
詩 寄 とも ち け 時 雲 峯 落 照

作者部類云。正三位友。有能。後二位友。能男。風雅。
新千載。新拾遺。作者

入。日。ら。守。岩。へ。の。ら。て。夕。言。れ。そ。ふ。ぞ。う。り。び。わ。ら。れ。や。ま。の。と
入。日。れ。照。と。岩。は。せ。も。埋。ま。す。お。り。て。ふ。平。づ。ら。り。と。埋。じ。也

民部卿の家百首秋 薄暮。松。風

吹。風。い。つ。も。り。わ。ね。ね。の。ふ。ら。と。や。夕。日。れ。う。げ。そ。ま。い。と
外。月。東。に。と。や。雲。へ。の。ね。の。と。れ。い。つ。も。り。わ。ね。も。し。ら。ふ。後。合。和。一
住。吹。来。也。風。の。吹。い。さ。び。き。た。又。ね。の。と。た。夕。日。の。さ。す。り。入
ら。び。と。也。び。や。の。字。疑。ら。や。非。公。た。た。や。也。句。を。の。づ。ら。い。あ
そ。く。や。有。其。教。を。ら。う。一

清子た大細云家あぐねと

のふとをみこころいん教あぐで我身いそらにけふまはれね

ついで縁乃詞也

侍從中細き。花のち後。和奇^{寄イ}亦人をけりて。茶花^{サイハ}

園^ミ少く奇くまきしと云。漣水

茶花園山城國葛野郡^{カトノ}有茶園^{サイ}乃^ニ亦^モ也^{ナリ}

茶花ハ觀魚量壽^{クワンイリヤウジウ}經云。是人中^ニ分陀利花^{ブンダリカ}云云

疏云^{シヨク}分陀利花^{ブンダリカ}名^ナ人中好華^{ニクニヨクニハナ}亦名^{モナ}希有花^{シユウカ}亦名^{モナ}

人中上華^{ニクニヨクニハナ}亦名^{モナ}人中妙好華^{ニクニヨクニハナ}此華相傳^{コノハナニヨリツク}名^ナ茶

花^{ハナ}云云法聰^{ホウソウ}記云^キ此云白蓮華^{コノハナハクハス}云云名義集^{ナニギミツ}云^ク分

陀利^{ダリ}此云白蓮華^{コノハナハクハス}記云^キ論語^{ロンゴ}公治長^{コウヂチヤウ}篇^{ヘン}注云^{ツク}茶

函君^{ツツノミ}之守龜^{ノモリカメ}云云此文^{コノミヤコト}茶者^{チヤノモノ}靈龜^{レイキ}之号^{ノナリ}也^{ナリ}出茶

地^チ史紀^{シキ}龜策傳^{キヤクサツデン}云^ク龜千歲^{キヤクニサイ}乃遊蓮華^{ノヨクレンハ}之上^{ノウヘ}云云

此文^{コノミヤコト}蓮華^{レンハ}者^{モノ}茶所^{チヤノトコロ}遊之華^{ノヨクニハナ}千歲^{ニサイ}龜^{カメ}即是^{ナリ}靈

龜^{カメ}故^{ナリ}也以^モ史紀^{シキ}文案^{アンマン}今^{イマ}釋意^{シヤクイ}言^フ茶園^{チヤノ}君^{ノミ}之守龜^{ノモリカメ}

出茶地^{チヤノチ}因^{ユヰ}以為^{シテ}名^ナ長尺^{チヤウシツ}有^リ二寸^{ニサウ}云云

一とらふそんをまらばね風のいさよをねぬあせりて

一とらひいそよもそれいぬあせりてさうてつり。一とらひ

あせりてさうてつり。一とらひいそよもそれいぬあせりて

後宇多院宰相典侍。及よ告くまけふとく。土師門。

禪尼乃結下婦 ときめらまきし名不奇し

塩竈浦

宰相典侍、志願すか土沙門、禪尼、ふきおと。母、不分
明一本云。内道女。系圖云之。為道母。賀茂神主氏
之。女。作者部類云。為道おと。女。後千載。後拾遺新
千載。作者

よがたれ海士のともをきてこれハ輝そくれあふり立いり
今ハ塩をとりやくす。あまの梅の輝のよきて。たぐはとさうあま
立れ也。例系乃たれおと。いさうらさみの身まうりての秋。か
くあふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ
くも。いさうらさみの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ
あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢

漢烟光漁浦晚 歌津三 伴津

舞惠よりをけりし名所あり

明海深

あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢

ゆりし作時いしゆれねとく延まれうづささか
そとて

かくて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢
あふりて。あまの。志願すか。と云ふ。さほをほくれ。漢

金經新記曰。三界苦道無有邊底。故喻如海。地藏
 本願經云。由瞻禮地藏形像。轉讀是經。本願經故自然
 畢竟出離苦海。證涅槃樂。殺生戒地持論云。殺生罪
 能令衆生墮三惡道。云云。知論云。諸罪中。殺生罪為
 第一。殺生之罪。最為重。殺生之罪。最為重。殺生之罪。最為重。
殺生之罪。最為重。殺生之罪。最為重。殺生之罪。最為重。
 海を以て譬するは。譬玉。うづくハ。物をうづくハ。うづくハ。被
 字也。捨とてうづくは。入の像也。別よ。うづくハ。海の浦とて
 入れば。うづくハ。わすは。すか。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
道舎。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
 わり。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
本願經。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
 うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
後世。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。
 乃。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。うづくハ。

たれに依和義。下。家。あ。く。う。み。ゆ。り。時。橋を

婦りゆきあぬう。れ。橋をみて。し。た。ち。あ。ぬ。む。う。を。さ。し。い。ま。さ。る。が。
 世。中。に。あ。る。物。は。け。り。ゆ。け。る。が。れ。い。と。我。身。也。う。り。
後。世。中。に。あ。る。物。は。け。り。ゆ。け。る。が。れ。い。と。我。身。也。う。り。
 う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
長。橋。乃。橋。を。と。て。い。い。
 う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
橋。の。縁。と。て。行。と。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
 う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。

清子たれに依和義。下。家。あ。く。う。み。ゆ。り。時。教を

おれに。て。い。ま。さ。る。が。れ。い。と。我。身。也。う。り。
 う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
何。を。教。と。い。ふ。と。体。も。わ。く。く。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
 う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。
龜。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。う。づ。く。ハ。

凡の教を。は。ど。こ。の。橋。より。あ。ら。う。と。な。ら。ば。あ。ら。う。と。な。ら。ば。あ。ら。う。と。な。ら。ば。

塔のいけハ、干深をく成る。波の音もをきけりゆけぞ。松風
るきか浪よ似りゆ。浪りも成りて。松よ錢よとれ。うね
ちり一梳。波濤松樹風。詩格。松聲。非金。非石。非絲竹。
萬頃銀濤。數五湖。詩格。尾とちり。松り梢ハ。おるいさ。波り
音もぞ。風も吹くる。拾雅。小。東。文。るま。い。文。ざり。や。氷。う。ん。を
びりり。ま。か。の。浦。信。拾雅。本。奇。ハ。氷。う。て。波。の。き。さ。う。り。と。塔
乃。干。て。波。の。き。さ。う。り。と。う。て。傍。り。予。謝。浦。丹。後。也。

海。眺。ら。し。

あやが。波。の。つ。つ。と。ま。ら。い。ま。こ。く。夕。台。ふ。る。真。れ。け。り。ふ。好。
夕。日。の。晴。さ。う。ゆ。海。上。く。ま。ち。た。れ。よ。釣。舟。の。ゆ。り。も。あ。う。い。は。く
又。ゆ。の。停。也。夕。陽。長。送。釣。舟。帰。杜。牧。三。一。件。詩。

令。道。寺。少。く。名。所。あ。ら。う。し。ゆ。辰。市。

龍。田。と。長。守。小。さ。く。う。家。秘。み。く。て。ま。ま。と。邪。ま。り。よ。た。ら。の。市。人。

風。吹。ハ。沖。つ。白。波。立。田。山。よ。う。ん。ハ。君。が。ひ。り。う。く。舟。ん。立。田。山。を
長。守。に。と。え。い。ゆ。ま。ま。と。邪。務。の。内。上。市。に。ま。り。也。辰。市。ハ。奈。良
乃。む。た。り。立。田。山。より。二。三。里。北。也。

川。虎。ゆ。く。ち。ふ。ゆ。あ。い。ゆ。ゆ。屋。ま。い。う。ま。う。と。中。之。任。
う。ハ。と。あ。ふ。

川。虎。ハ。渡。川。の。末。也。難。波。一。道。

思。ふ。と。難。波。れ。あ。ま。の。り。不。火。小。長。守。れ。煙。を。と。ん。た。と。ま。
我。葉。の。烟。を。難。波。れ。も。や。多。く。火。と。同。一。極。と。ま。と。い。へ。道。て
ハ。思。ふ。と。う。く。今。日。こ。そ。な。て。そ。つ。く。そ。中。へ。か。れ。と。也。日。古。に。
神。國。と。火。葉。ハ。か。う。ら。う。に。道。昭。信。師。を。火。葉。一。せ。り。始。
け。り。元。亨。釋。書。道。昭。傳。よ。か。

周。嗣。西。り。上。人。自。筆。れ。る。家。集。と。け。て。け。り。を。家
を。法。勝。寺。僧。坊。の。火。乃。と。ま。や。さ。ゆ。く。後。又。新。紙。れ。

松をくわいていりよきととちて竹をみせたりも乃
わくおち竹竹

周嗣作者部類云新千載作者

輝くふたさきとわまれりか子又うきをくをわくはれをよ子
とくかよとまにまろ烟を人今へ絶てわくはるこり入りか
まをさるふあじりと煙をく方けつめて山あ集のなけあ烟
ろ松をまちく成しよ又うき改められををちてよんを止
かまは煙の中は有蔭也ゆかををく烟といんあ也又
いんあまのわまれりれをくといんあ也

民部卿宰相中將と^{トイ}信吉社を^{トイ}終ふはらうて
名所れ物ゆく^{トイ}観文臺なほほくうて奇蔭をくし河
和奇乃くれ石あり観けくりしてとくはけしけも後
わちれ浦やんくは白波乃岩ふくくけくわしとい志也

月をいりまの波のをほものころんでて物をさうはか^{トイ}わ
奇はをさけ終観文臺を^{トイ}終ふはらうて他人のわたりあ
く感ぶる人まれしやをくでな観を作してまのころるを
ごをよおしはれ也信のころるもまをけしてと云しゆ也ゆか
くごのころるくをほくしてゆ也粉骨碎身といよ同

つらつらわはらり出れいりてさくくくね乃福のころる
^{トイ}わかくていんをくくをそ観を作して終るこりゆき
ゆ福のころるくも也雲のころるをまねて秀句といつら
茶笑白飯より百首は奇みきくもはらうてを返すまの
りいと青のみまのころるをわくふくもはくべまゆお
かせくはら

さのころるをほくしてはらわわあはらうり乃あやあうん

伊勢の海に玉とよかり候おれ海の清濁乃ち不ざるは乃の
とやつらん貝のららん。あやららん
催馬樂 伊勢海 浦と云浦と云らん
あつらんが指の玉のあつらん

後宇多院時とよきる百首れ奇とて内覧せ
らして清和あく板條とて侍とて後権僧正道我尸
をくもた

道我作者部類云道我仁權僧正無動院權律師 續千載 聖著子
續後拾遺新千載新拾遺新續古今作者藤原系圖
云道我東寺權僧正無動院住八坂日野位四位下侍
朝臣曾孫權律師聖著子兼好集云東海へまうけし
に清和寺にまうて道我傍のまて

特一のい玉のらんとあつられてかよよとゆる和らけり
千和者楚民得玉献懷王使樂正子占之言石王以為欺

謾斬其一也 張王死子平王立和復獻之平王以為欺斬其
一足平王死子立為荆王和復欲獻之思復見害乃抱其
玉而哭晝夜不止涕盡續之以血荆王遣問於是和隨使
獻玉王使剖之中果有玉乃封和為陵陽侯平辭不就而
去云 續集寄は述懐あゆり詞に玉れをあつては不
らん人の奇よりこえとがまれ方也故ハこゆるわらんゆり
つらん時われらん内事ゆれ也よれ何いあらん也一は字
那字也花盛開續集の家松よあらん

あふたさうい出らんらん浦の流乃下草とては朽あぐ
和奇の浦れ流乃下草とて同じ様かろ奇あれハ岐のちん朽也
とだ何とてらんあぐそのよまてすえあがありまも
甲下れ也

兵部。既長秀家わく歌をさぐりて歌よむけり
秘波蓋を

より小公のりき津の國にありの事いへてやましこの事
伊の必承るよの事いへて津の事いへる事いへる事
右國を思ひてよし奇にあらば人の評判いへるよ公の
けい。おのゆへをよみく。奇の事そのいひなり。秘波よる
いのや然こよよよ

堀川宰相 定宗 くらりてつとらけいけの事よ

定宗作者部類 著之當世稱堀川水之瀬 慶流也。此
堀川と別流乎系圖に不出

少とけてまんぞとりく。交遊れちふゆりわるるをいへまよ
周最一 蓬の屋くても。於河江呼いお歌の乃と年うく功者
かりゆへい。ふて。それいえとふ也。交遊りるといふよとて

ふくまのり。くらりてつとらけいけの事いへる事
新)

漢子馬よりあつ代にけいあわとれみらたふ家わくれり
堀川の歌。代この奇にあらば人の事いへる事。たふりへ
君うねるゆへて乃の事いへる事。たふりへる事。たふりへる事
又字の事。をえて。おの事也

返一

すうさうら。くらりてつとらけいけの事いへる事
蓬の屋くても。於河江呼いお歌の乃と年うく功者
かりゆへい。ふて。それいえとふ也。交遊りるといふよとて
後成は女形 けいせもまら月乃歌を
後拾雅下 閉門柴門畫靜掩蓬蒿
子秋下 呂耐軒 於河の事いへる事。たふりへる事。たふりへる事
詩格上 けいせもまら月乃歌を
けいせもまら月乃歌を

を風よそよも梅花をさるわやあはらうける 修善上
中しんをさうまはくもかうたせや花けい後とありん
遊母者さしバ世東よゆはくとも幸いあけさども 世上の
盛は成るれば花乃後をね。教とわじまよの心をけい
幸か。世とう花のさうりよ水のさう。人乃かもし ハハハ花
をれバ。何ともく風信くくけりて。我知とわくよあまよ
いまじの後と花よ取らば。 世風よ花争らぬ也

秋秋中

いなき秋のうらみ葉よあまよ物あし袖の秋れんさ
秋の風のつら吹物也。さしども。秋ハ非情なるわかれバ。風の
あのみそよく計した。ゆはつこまじりまのあつ。我神を
秋の心と同一中らにさね。さけバゆはつこまじりまのあつ。
わしハげれがゆらふゆはつこまじりまのあつ

下風のそよ老花はゆき乃花より曉夜やじとひそひん

新る夜。又ハ秋の妙のこまハ曉也。夜とのこまハ。同一葉あ
ら。月ハ是て。わいさく明ぬをいよ也。曉れあハ老の孫もあ
花よりけりてしとびて。草木のうらみしとづん。秋の
出さハ秋のうら。花のあハ海也。曉れハ曉更照射し物より

茅持院贈た大長家又首より

秋の風

そよあまよ海をりやよハ中のでけくぬわ乃秋あまうら也
世の中れうもた飽くうらよ。又秋乃上風をさるて海もあれも
らさ也。うけくハ愛也。 世の中れうけくよあまよわくハのよハ
まハうらゆらけらま

建武二年内裏子首より

秋の動物

秋風の白くふさぎむさかうのつらまらうじく々言ふ
是川のこまよそくて秋風乃日ごとくさけいよそそ

秋風よもよもよと来て麻の妻をまよふ夕言ふかく毎日ほろい
るゆへ也

長麻と

ほろいひのちちちと来て小倉ふらふらしてよまればわうの声
梓らむいけの本糸我方にまよふことまよふこと此のふい 春道列指 扱ハ
しつ妻をらつらゆへ麻の扱れまよふ也小倉ふらふらと方によ
りてよまればわうのふらふらとゆへにまよふことまよふこと わら
とてつらつら麻よ妻

川の勢

ふらとれ波よゆゆと秋風ふらふらしてどろろと流うづれまよふ
吹まよふ吹頻ると吹まよふとまよふ此のふい吹まよふ也意上忠
意の二首目真は風煙吹くものまよふはまよふのふいまよふを波
り吹くことまよふは麻舟のまよふはまよふはまよふはまよふはまよふ

面白き事也

侍子と入道大細言九月十三夜十三首

第一月思者

老くわらうげはうまれど月のまよふまよふまよふまよふまよふ
大方は月をまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
わらうまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
あや也形見意納すも月のまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
よまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
秋れららうまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

山里小月のまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
時こそわらうまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
まよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ
戒ふ心わらうまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふまよふ

多め子昆毘羅乃。しう常。こん結。が。これ道とてくね。
は。このうら。ま。く。け。り。何。う。く。け。り。か。
風俗通云。枇杷。謹。按。此。近世樂家。所作。不知誰也。
以手批把。因以為名。長三尺五寸。法。天地人。與。五
行。四。絃。象。四。時。

面鏡とのうらぬ物をいつみとちうその月をわづらひまにたん
琵琶にす月。有ゆ人也。新は撰雜下に。東二重院乃。半物。
川浪。とのちうる男。身まうりにくろ。を。し。を。れ。る。と。そ。の。は。
られをのい。い。を。し。く。ろ。と。ま。て。常。盤。井。入。道。を。改。大。長。月。か。
ふ月乃。桂の面鏡を思おて。やうれたる。身。返。し。東。二。重。院。乃。
物川浪。り。た。く。り。の。浪。も。出。し。今。又。よ。半。の。月。を。神。ま。せ。て。
奇。れ。ぬ。い。琵琶。引。糸。を。捨。て。は。ぬ。を。ふ。う。ら。ね。バ。い。ん。の。面。鏡。
の。こ。ろ。ぬ。い。づ。れ。に。へ。つ。の。月。が。め。づ。り。と。そ。我。方。は。け。こ。り。り。る。

そ也。面鏡。ち。く。り。何。れ。月。乃。縁。也。

氏部御家八月十五夜。月番虫

虫の音とまじりて。ふらう。ま。て。を。り。ぬ。と。ち。あ。月。れ。け。か。
秋のよ。い。か。こ。そ。て。や。ん。ま。め。じ。ま。村。こ。の。虫。の。ま。じ。り。
詞。ご。ろ。を。あ。ら。り。月。れ。ま。ら。う。草。村。の。聲。も。も。思。こ。ゆ。も。也。
月。ぬ。い。あ。ら。う。て。鳴。也。

秋のまじりの聲とまじりて

朝日さけぬく。う。草。根。小。こ。も。く。長。さ。ひ。れ。お。ふ。し。つ。る。虫。れ。る。
夜。中。の。お。よ。し。り。り。る。虫。の。ね。も。狐。日。こ。の。ま。の。さ。け。ま。れ。る。
乃。根。も。也。草。根。ハ。草。れ。根。也。君。が。代。り。つ。せ。し。ま。れ。や。虫。
代の。岡。乃。草。根。を。い。じ。と。い。ん。一。万。あ。ら。ふ。ふ。草。根。刈。ま。げ。あ。ら。
ず。く。わ。く。も。入。株。も。あ。や。に。也。り。人。九。万。
ふ。ほ。く。ぬ。紅。紫。を。う。て。相。換。守。乃。も。く。わ。く。り。り。作。り。小。返。

つた

何れも此の物をさみぢけはけりけるふおれを添て
るまゝ也。この通るうゝ相模守の方也。相模守ハ水條
貞時。貞新は撰至新千載作者也

びくのもこのおれをいふにじやくそめてく種をみんたり
後人亦云 古春上
公のうゝく保そく折されば消あへん吾のたのみゆるん
うごくとくともあつゝる程なるていつれもおれをいふぬ
とゆる也

返一
此河の返一也

紅をくふうとをわいさくたおれをよめをふうたんと
あおれしたる程ううて我をるをされば中くおれをいひ思ふ
程いあつたれまじ也。あおれし心をううておれをいひ思ふ也

我をとりせてううとくとい。おれをいふ家也。よし七つ返り
民部御家二十首あり

そい種をとり田面けりおれをいふ家也。いふ言ふ秋入る子
をいぬ。既田の稲也。秋の田けをいふ言ふ今よりおれを
ぬいねのよきさうりん 雅成親王 法古林下 稲を刈てかすふ。何れもおれをい
ふ。其間をいふれくその言ふる伴。よくうらされり也

お坊くもさそを路へ後六條中納言也。世をのびて一切經
をいふ。いふれは。おれをいふ。いふ言ふ。いふ言ふ。いふ言ふ
いふ

お坊とい。東官坊といふれ路へをいふ。六條中納言部
類系圖より。一切徑谷也。今之粟田也。神明社乃
南谷也。盛衰記云。粟田口のもも一切徑谷也。

お坊とい。いふ言ふ。いふ言ふ。いふ言ふ。いふ言ふ。いふ言ふ

色の子狩は色この後也 春 春の夜さの子狩はつるんきれ
引と入るたの秋も 奥見 春上 秋のあまきくぐんをけつとふた
ひまの千枝ちろく 法文不記 古秋下 ともね本のく城はさゆゆ風も色乃
子狩よ見ゆ也 お ともね本の法方本のを也 秋のつる
同くれの冬にねせなれ本のをふりほもきん 格下 外もま
り可なるその終まより西方本のくねつる あまき 日とちた あまき

川氷と

そとじこくがごとく ま 長く小岩はまうにし 川 川は
まのさじこく 珠 川ゆ 流 すすおく ま へ ま へ ま へ ま へ
りてま ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ
ハ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

水鳥

池の氷は ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

氷つ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

十月は ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

トヤ

林五月 ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

井 ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

く ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ ま へ

ホッる

ひくつりぬるささけいひるれぬるゆふをぬるにけり
ふらふは情の行はるるささけいひるれぬるゆふをぬるにけり
深きもさうめりも雪の縁也

歳暮れころを

人ともくせせよさう老れ力をくれゆく年ぬるささけい
公道世間惟白髪貴人頭上不習饒許渾三作 万葉貴
賤をよけていささのあり言の年ハむの力をくれゆくささけい
さうもろけりぬるささけい

[Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side]

草庵和歌集蒙求護解卷第十三

梅月堂僧宣阿集編

梅仙堂平景新訂正

真宗院兼空上人をくつむはゆり次小

真宗院。圓空上人傳云。釋之隆。号圓空。就洛南。草

子。風雅。新千載。新續古今作者

ふれふろし人ちと今いじうふて野とかりいづかやうまれさ

昔をて信ふし東といでいさばいづは深きゆりやゆらん昔

はすれぬも人ちぬるが今いすれぬも人ちぬるゆりのゆりぬるさ

あまのゆりの詞。上句はうけい合ふ也。兼空の深草のまへ

深草のまへゆりまるといふくまゆり

返り

ふ家たけが事こと世よ同おなくはつて信まことたをたど。ねんくさくうかなわが
世よ同おなくさくうかなわつて信まことたをたど。ねんくさくうかなわが
同おなく事こと也

ふ家たけ篇

まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと
ふ家たけされど。いづりうづまをいづり信まことたれも。あはれねの
さびしき身みふれも。いづりうづまをいづり信まことたれも。あはれねの
あはれし事こと也。いづりうづまをいづり信まことたれも。あはれねの

金蓮寺きんれんじの秋あきよみゆり ぶ家

ふ信まことれまが。かみれが。まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと
ふ信まことれまが。かみれが。まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと
ふ信まことれまが。かみれが。まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと
ふ信まことれまが。かみれが。まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと
ふ信まことれまが。かみれが。まへにふしひのよきまをまにまひてあはれまきりみねれねと

お塔たけあつとま来たきたと

おのをを

あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。

あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。
あはれねふしのたふあつとま来たきたと。あはれねふしのたふあつとま来たきたと。

とて世に世に... 草履論 十三

山家路

とて世に世に... 山家路

との類也。瓜本とくわいの誤也。松つむ若葉はひたさか類也。何れ

じふ今ついかざうと山里に... 惟 草履 一 迷

かまといふれる山人乃... 惟 草履 一 迷

山家水

もふ法... 山家水

山家獸

さぬらの松がふのこきさをのぼう... 山家獸

始ハねのわしの思ひあつが今いさしてさしきりよき
又おくりいふまゝよきス堂のさびしくてさけい思ひ物くね
くねくまのわき也

ふふれねよばれいやりもゆる所よたつ縁まうりて
侍しよくいたくてしらいさきことたて侍しうぶその
よふしよといふなり

今ぞいふふれねゆふとね風乃く急とらゆく人の住り
琴をね風よき也。夏の葉うつる風ぶが現うしをばてん
葉のつけゆきまはる妙乃岩のね風吹くことば
二弦、索々、秋、風、拂、松、疎、音、落、白、ひの中は住人の方は
と思ひはるふ今あくるしはがふふりねふも現うを
人の住りよとくるふ侍てと。やうくも侍てとれる人
と遊む人よふりま也

山家松

とらうまの昔れどもあぞとれゆく風乃きぞらび
御をうもてる人にせん妙のねしりの友な
ふらう住人はねをこそ友とすまは友はなす都て風乃
音れさびしき也。昔の友あぞとらうまも
住れまふらうりてとれゆく風乃きぞらび
ま風のまふらととらうりてとれゆく風乃きぞらび
ま風のまふらととらうりてとれゆく風乃きぞらび
方は山の中なりとらうりてとれゆく風乃きぞらび
住れまふらうりてとれゆく風乃きぞらび
とらうまをなすらうりてとれゆく風乃きぞらび

尋らうりてとらうりてとれゆく風乃きぞらび
とらうまをなすらうりてとれゆく風乃きぞらび

長くすみくして始む。本風身に入てさびくやゆの也

氏初々家十首よ ね風

本風とたゞどさびとさ里をこりさぬの事と思ひくるるか

さ里の人のこりぬづらざびと思ひます。人れこりぬの事

本風と常たさびくまねをさ也。これと返る事也

房室れすのを他洞よりつさけ何結竹竹

友とこくねれ風とをささどハねんさやさひあはし

は言。新拾遺集。兼中へ入。前のかい。ゆな。たさびとさ里

かなんげねをうらされば。今まで友とさやね風さ入りさつと

ゆさささ。いふくさ里やさびくうらぶと也

清遠へ行つて。房室れ初の本れ枝ふ結竹さ也

新拾遺よ。ゆなへは室れ初とせん

ゆいさ。ゆさりとも。屋色とさ里い。このささくけるねのあしよ

なれの何のね河ね友とまじね風を。は室の園をてうの友がた

いしわとれさい。さ。さ中せらる也。これの何のさね風とさ

らて。新方河のさひうらと事とさる也。金殿天樓

らさ。園呂さ。しり。き。本風か。まは。ゆして。草。房。達。心。て。安

け。と。さ。い。と。づ。ら。ら。也。つ。れ。と。思。右。さ。も。結。ゆ。也

の家送年よ。云んを

さ。飛。し。を。老。と。あ。つ。た。で。也。思。い。さ。ぬ。今。の。さ。ひ。は。や。く。て。は

始。い。さ。び。い。さ。に。さ。く。も。さ。か。に。信。え。ま。す。ま。か。し。思。い。思。い。も

さ。や。め。や。して。今。の。老。い。成。ま。で。さ。び。い。さ。か。思。い。ま。か。さ。ば。あ。ん。や

こ。ら。よ。ま。さ。び。て。信。と。つ。る。ほ。く。あ。つ。と。也

は。下。玄。忠。教。よ。り。ゆ。い。の。家。贈。る

玄忠部類よ。さ

葉れ戸ふあがむらこのあうらやばねやさひとさひあはし

伊予太夫の家四季百首

よし田代をこのうきをいあかしてありよこせよんらく
のこの田を守るに板に緒を付て引つくとおせ 衣どに
及ぼくす大楳一田を引板に引てすもいりておのひ
うに音りわい 手習 緒をうけあつていつ 例 秋田のり
まは打ててすもす人をもてるは 衣笠四糸 してはたふ
物るれいぞれさせん何とておのりくまをく引板に引て思
ふとあり引板に心筋秋の田家無田家秋風よ

寄情述懐くそりや

くひんれさしをれぞ控中めうきこりあへてあはれん
かここのもは掻籠あく頑まを此奇よは垣の内りこり
ま...とてえり。掻捨る。掻捨するも同一まうてあはれ詞
おりの類也 例 いんせんまが園生のわくれ作らここのも

世の中とり

後成彩
古新中

草房より引りてあつてあはれん

おのれ道乃情をえ捨中ぬまよと也

等標沈務た大良家五首よ 述懐

おのれとと人わはまうれうの奇かれんは 五首 孫をわんじ
五首思わゆる奇をも。おのれとと人わはまうれうの奇か
きとくちくちくばと也

おのれんを

おのれ浦小考てかこくわねるうづのまをち思ふ一はうき
和秋浦の紀列の名前されども。その事によていつ事也
ねがねの考てかこけいもまごうのねがねやうに 五首 考年
てこのひ奇れぬる。煙もあやあこつひのれさ事也。どつ
ゆれぬる 法 其まきの下に 例 杖とて埋とぬるをみるぞ
忠い 今頼下 遺文三十軸。軸々金玉。龍所原上土埋

骨不埋名白氏詞詠

文詞

新子裁集えりしはけし出づるを。彈正公家。

中夜とてさうしんせまゆりやぶふのしを。返

し給ふまはけしひよ

ふがさうまこれ玉のそであうけの若瓜のこりといふ

和奇をちてみづさしむくあまばり。金玉きんぎょのまるといつる

類也。撰集せんしゅうし入ゆ。陸分りくぶんみづさそあさりあられ。上代じやうだいより

の風かぜをいけしそるそゆる也

けむい

老れはまかさねふしむねのむもくばいひを。おとす

一二の句ハ老のつらさる後也。老るはけりける身みもはけり

けりさくちる思おもひも。玉たまれまふまもけり。海うみも

兼かね退ひる也

白氏文集。余年七十一。不事於吟哦しんがとて。これおとす

今ハハレんとせどあそらさるまふ後ハわりのさる

白樂天はくらくてん乃詞のつくれ河師かへしも七十にわきりしれい。和奇わきに公

と下したを候まを。指させ乃けり針はりの成なりとて。ゆるゆる

縁ゆかりの詞也

序しよ子しよた大細言家おほこほごんけやく。寄よ身み述しよ信しん

和われ浦うらやるぬくは世よにあつしつとて。老のそまを。そを

方かたは月つきをそりて。これ後のちハハの老ふるとさる。この時ときある

たまの代しろもきて。なぐ撰集せんしゅうさる。入いれは。けり。さるまふ。

それとつれい。年月としげふをかさひて。老るはけり。成なりり也。わ

くの浦うらとさる。老の候まをと物ものれり。むの縁ゆかり也。わ。けり。わ

後のちつと也。何なにもけり。身みれ老る。幸さいはけり。けり也。

迷情の奇ありあきとて俗し中

まづいふ力をわくふらうと家をわかれろろいづれぞかか
強^ツれ^ル齡^ハの^ハつ^ハか^ハも^ハわ^ハら^ハ身^ハを^ハい^ハふ^ハ也^ハも^ハ身^ハを^ハい^ハふ^ハ
金^ハて^ハ心^ハ用^ハり^ハす^ハる^ハと^ハよ^ハゆ^ハ老^ハて^ハつ^ハか^ハれ^ハふ^ハ入^ハん^ハ事^ハと^ハ志^ハ
ぐ^ハ也^ハ身^ハを^ハ志^ハす^ハ奥^ハふ^ハい^ハつ^ハい^ハけ^ハる^ハ也^ハ

や^ハで^ハる^ハん^ハ今^ハ一^ハや^ハと^ハあ^ハい^ハん^ハふ^ハく^ハは^ハと^ハみ^ハず^ハ先^ハの^ハそ^ハで

け^ハ奇^ハ新^ハ後^ハ拾^ハ遺^ハ離^ハ下^ハ入^ハ思^ハい^ハも^ハか^ハく^ハけ^ハる^ハと^ハ有^ハ伴^ハは^ハ終^ハ終^ハ

今^ハ一^ハ位^ハも^ハ上^ハら^ハゆ^ハり^ハに^ハ思^ハい^ハは^ハ任^ハり^ハを^ハこ^ハき^ハら^ハう^ハ事^ハと^ハ悔^ハふ^ハ也^ハ

この^ハか^ハその^ハか^ハん^ハと^ハは^ハ衣^ハも^ハ今^ハ一^ハ入^ハ多^ハほ^ハく^ハす^ハは^ハな^ハ中^ハと^ハ思^ハ

あ^ハい^ハも^ハた^ハく^ハか^ハれ^ハ内^ハよ^ハら^ハら^ハけ^ハる^ハ墨^ハ線^ハの^ハ神^ハと^ハ年^ハを^ハい^ハふ^ハ也^ハ

く^ハいつ^ハる^ハは^ハ名^ハ聞^ハの^ハ色^ハ衣^ハも^ハ非^ハけ^ハが^ハす^ハら^ハは^ハ衣^ハの^ハ色^ハも^ハ次^ハ分^ハれ

ほ^ハく^ハか^ハら^ハゆ^ハへ^ハよ^ハと^ハ入^ハて^ハい^ハつ^ハ也^ハ

や^ハ中^ハれ^ハう^ハと^ハ張^ハり^ハい^ハと^ハ思^ハい^ハよ^ハら^ハ中^ハく^ハふ^ハ乃^ハ朽^ハへ^ハた^ハつ^ハ絲^ハ也^ハ

と^ハ呼^ハし^ハ世^ハ界^ハれ^ハら^ハる^ハれ^ハ世^ハ間^ハの^ハま^ハた^ハ一^ハ相^ハ無^ハて^ハ有^ハる^ハ也^ハ

思^ハい^ハに^ハし^ハて^ハ中^ハに^ハけ^ハて^ハふ^ハ乃^ハ朽^ハを^ハも^ハま^ハり^ハ也^ハ世^ハ間^ハは^ハ長^ハく^ハあ^ハり

朽^ハの^ハ字^ハ短^ハく^ハあ^ハる^ハと^ハ中^ハに^ハま^ハて^ハ也^ハと^ハ中^ハに^ハか^ハて^ハ朽^ハわ^ハく^ハ深^ハく^ハ尋

る^ハ非^ハ姑^ハ知^ハ真^ハ陰^ハ者^ハ不^ハ必^ハ在^ハ山^ハ林^ハの^ハ心^ハを^ハあ^ハり^ハん^ハと^ハ三^ハ曹^ハ一^ハ

心^ハ深^ハく^ハあ^ハり^ハ

人^ハく^ハ影^ハを^ハさ^ハぐ^ハり^ハて^ハ秋^ハも^ハあ^ハり^ハ 寄^ハ本^ハ迷^ハ情

あ^ハら^ハあ^ハ風^ハを^ハそ^ハた^ハし^ハる^ハを^ハい^ハく^ハと^ハん^ハ考^ハ未^ハだ^ハと^ハ朽^ハつ^ハて^ハぬ^ハ事^ハ也^ハ

朽^ハの^ハ母^ハの^ハ事^ハに^ハし^ハる^ハと^ハ母^ハの^ハ老^ハて^ハ朽^ハを^ハあ^ハら^ハり^ハに^ハし^ハつ^ハり^ハら^ハん^ハ也^ハ

あ^ハら^ハあ^ハ風^ハ雨^ハを^ハあ^ハら^ハけ^ハる^ハとい^ハく^ハと^ハん^ハ今^ハ少^ハの^ハ事^ハれ^ハし^ハつ^ハい

ま^ハれば^ハ衣^ハ含^ハ信^ハの^ハ事^ハ事^ハに^ハ不^ハ自^ハ由^ハの^ハる^ハま^ハや^ハら^ハに^ハ孝^ハと^ハつ^ハじ

た^ハれ^ハの^ハ修^ハ也^ハあ^ハら^ハあ^ハ風^ハを^ハあ^ハら^ハけ^ハの^ハ朽^ハし^ハる^ハ小^ハ秋^ハも^ハあ^ハり^ハと^ハ

思^ハい^ハく^ハと^ハか^ハれ^ハ相^ハ妻^ハけ^ハ詞^ハを^ハと^ハり^ハ一^ハ後^ハ終^ハ所^ハ俗^ハも^ハあ^ハり^ハく^ハ一^ハ何^ハも

奇^ハい^ハゆ^ハり^ハ世^ハに^ハ朽^ハつ^ハて^ハも^ハ吾^ハ世^ハに^ハ朽^ハつ^ハて^ハ朽^ハ考^ハる^ハ世^ハの^ハ价^ハ抱^ハと^ハ

いふもとていふ人捨らるるなりは是れはたりの
をいふ人ていふかたよりいふ世出世の孝養の
道と万物の第一は儒の孝を従ふ孝経といひ四書六
経其の外不可勝計梵網経曰佛初坐道樹成無上覺
初結菩薩彼羅提木及以孝順又母師僧三寶四十二
章経曰九人事天地鬼神不如孝其親衆勸勸者偈
云堂上有佛二尊只看現世爺娘此外好多あり

彈正尹親王家ゆく 述懐

うた身といふ小歎んぬおどろかき世をい
ぬる人男といひ何は歎んぬおどろかき世をい
ふ也ふりし世に年月をふり也

懐迷懐

ふりし世に年月をふり也

わが身といふ小歎んぬおどろかき世をい
ぬる人男といひ何は歎んぬおどろかき世をい
ふ也ふりし世に年月をふり也
素とて平生常にいふは何とていふは
思ひわの身いふはいふる身をつけりかまの現
引きまの身の身いふはいふる身をつけりかまの現
之後玉 我よりいふはいふる身をつけりかまの現
雅三 我よりいふはいふる身をつけりかまの現
りふまの身の身いふはいふる身をつけりかまの現
是ていふる身いふはいふる身をつけりかまの現
の終末いふはいふる身をつけりかまの現
いふる身いふはいふる身をつけりかまの現
子たは細をいふはいふる身をつけりかまの現
いふる身いふはいふる身をつけりかまの現
登乃内物よまきて身の上いふはいふる身をつけりかまの現

ばがふ身に何やうやう事どもは皆身の罪科とて。さうの
かり事をも思ひたるゆへに教戒するれば。秘意の明とて
わかや。長の明の成れしむ也。むかしの形つゝ。又下知のむ
も同一。意とてを成らるる。又川を流るる。明すもあつた
後合ふ
古秋 詞斗をさむ

寄雲述懐

しめさよととらん。ととし。ささけ。そのし。ら。み。う。り。う。後。と
その途。下。は。修。後。は。聖。意。の。本。途。は。世。も。の。立。修。也。世。も。の。立。修。
へ。を。お。た。う。て。ね。む。か。外。れ。方。へ。ま。は。ら。う。ら。は。何。の。詞。に。け。り。や
かり。も。う。け。り。け。り。也。又。さ。う。も。に。く。か。せ。り。き。う。と。ふ。と。縁
詞。也。し。ら。い。そ。入。日。の。そ。と。詠。ち。い。い。色。の。立。修。を。ま。う。ら。う。ら。う。
明。情。の。も。れ。し。う。を。ま。う。ら。う。の。月。の。う。ら。い。也。う。う。
後合ふ
古秋 金蓮寺あり述懐涙と云事と

老れもばりふゆれたつる涙も我さく志とてわづらひ神か
老ていふより。て。月をらん。花をたうら。と。か。何。ふ。け。り。も。物。を。ね
涙。も。う。ら。う。何。ゆ。は。さ。る。と。事。は。我。さ。く。志。と。て。神。か。わ。ら
あ。也。あ。ま。く。ら。い。と。ま。よ。い。の。月。何。ゆ。さ。る。秋。の。涙。と。
後合ふ
古秋

後述懐

とくしうりおらぬ力れいりして老とあるもどつさあうらうら
世をすくしうら。世がれね。と。事。も。さ。ま。よ。い。で。老。と。あ。ま。く。ら
命のはねる。き。え。ら。事。を。早。く。修。後。の。夕。を。ま。う。ら。う。九。子。道。
意。と。て。う。ら。う。也。

長委家ありむあつた

沿わさばあつた。と。も。あ。げ。り。も。と。老。と。と。人。い。ま。ん。を。う。ら。う。ら
此。前。新。拾。遺。雜。中。入。考。て。は。此。と。長。生。す。う。と。て。又。方。沿
つ。の。あ。れ。ば。あ。つ。た。事。あ。ら。う。と。も。う。や。な。あ。ら。の。ま。う。ら。う。ら。

をいかにさしてたげうず。後遊のありとも。老うをるれば。老い人
がふまきうへも却てはるさまをいふ也。海くわんの時をいふも
の。沙子た大細言家のみ。寄世述懐 十一
昔としておろしうたを思ふか。華れおんを思ふか。あて
は。ごと物のち。さままをいふ。年のみう。何
おく思ふ也。思ひての。秋下え。盛さをいひて。あか
く思ふ也。

述懐

七そられ。ふ。ふ。ふ。の。は。我。有。て。定。る。れ。せ。れ。あ。ま。り。さ。り。た。い。
老。少。不。定。と。い。ひ。若。て。死。す。ん。新。の。非。若。て。死。す。ん。あ。る。ゆ。人。
不。定。と。さ。り。と。て。老。人。の。人。づ。り。に。て。い。ふ。大。方。六。十。の。り。あ。て。
死。す。ん。が。う。た。は。は。か。ら。ゆ。人。さ。り。さ。り。さ。り。と。い。ふ。一。有。餘。も。非。
不。足。も。非。と。て。六。十。と。い。ふ。七。十。と。い。ふ。を。い。ふ。は。さ。り。さ。り。さ。り。と。い。ふ。

不定といふ。又。有。餘。の方。也。それ。ゆ。て。物。づ。り。さ。り。た。い。世。と
い。ふ。六。十。と。い。ふ。七。十。と。い。ふ。定。り。た。ま。る。れ。い。あ。方。と。い。ふ。さ。り。さ。り。と。い。ふ。世。の
あ。ま。り。と。い。ふ。杜。工。甫。の。詩。も。人。生。七。十。古。来。稀。と。い。ふ。さ。り
と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。年。と。い。ふ。又。不。定。と。い。ふ。世。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。外。也。
と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。残。り。と。い。ふ。長。さ。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
人。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
老。を。い。ふ。人。の。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。何。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。涙。の。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。常。に
あ。ま。り。と。い。ふ。也。老。と。い。ふ。也。た。と。い。ふ。老。と。い。ふ。也。老。去。に。あ。ま。り。と。い。ふ。
か。思。ふ。一。

寄世述懐

あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。
あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。あ。ま。り。と。い。ふ。

懐舊

愛しうとていつか... 年月のいくせりむれうとてあつと
あ一方を思ふは。愛しうとてあつとあつと...
けりていつて老の程とい成て... 一切有為法如夢幻
泡影如露亦如電。應作如是觀。金剛經の又とて...

れあふを

かづり神やいねまんといでれあふの... 思ひあふ...
さま... 思ひあふ... 思ひあふ...
涙は神のかり... 思ひあふ...
ま... 思ひあふ...

海子た入道大細云家十首

とて... 昔... 思ひあふ...

ほねさきの河... 昔... 思ひあふ...
さ... 思ひあふ...
た... 思ひあふ...
思ひあふ...

懐舊

か... 思ひあふ... 思ひあふ...
我身の... 思ひあふ...
あ... 思ひあふ...
我友と... 思ひあふ...
と... 思ひあふ...
引合へ... 思ひあふ...

金蓮寺齊合 懐旧

けいこくそく昔然とてく申ふれりていよめい思ひてやまぬ
我とい昔もた思ふよちるまのさきゆへや。んもさじん人ばて
よやく昔を思ふゆへ也。漢書張衡傳は貴耳賤目と有
引合ふるべし。後拾遺の序にさくまをかくらとて。んる事
そつうとすと有也此詞をとり。みるはさくま。目はる
幸也

れかをを

あしむんぬい物どの志りだよあとかもわうんぬ志を弄
老の勇入るまをまきうててく思ふべとまはる。
きくさしじうれりささし物。これ志りの同ほされて老
りうん事をささう也
清子た入道大統言まゆく寄る懐香高といよこ
はと城

あしむんぬい物どの志りだよあとかもわうんぬ志を弄
老の勇入るまをまきうててく思ふべとまはる。
きくさしじうれりささし物。これ志りの同ほされて老
りうん事をささう也

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

